

福岡県人権啓発情報センター ヒューマン・アルカディア

2026
はる
Vol.101



2025年は戦後80年を迎えた年でした。戦争を体験した世代の高齢化は進み、いよいよ戦争体験者不在の時代が到来しつつあると言われていいます。メディア等でも戦争や平和に関する特集がある中、近年、戦争体験によるPTSD(兵士の心の傷)について、その家族が「戦争トラウマ」として証言活動を広げ、注目されています。
ヒューマン・アルカディア「はる」号では、戦争・平和を語り継ぐために、県内外の主要な施設におけるこれまでの取り組みから、これからの私たちにできることを考えます。

特集

「戦後80年」をこえて、戦争体験を語り継ぐ

戦後80年…大刀洗飛行場の歴史を通じて
平和のメッセージを発信する

▶ 筑前町役場 副町長
岩下 定徳 さん

碓井平和祈念館のかたりつぎ

▶ 嘉麻市教育委員会 学芸員
伊藤 みどり さん

しょうけい館と戦後80年

▶ しょうけい館(戦傷病者資料館) 学芸員
半戸 文 さん





筑前町副町長

いわした さだのり
岩下 定徳 さん

昭和58年6月から旧三輪町役場職員。平成20年4月から筑前町企画政策課で大刀洗平和記念館建設準備を担当、同21年10月に開館した記念館運営に関わる。同26年4月から筑前町教育委員会生涯学習課長、同28年4月から筑前町企画課長、令和3年3月定年退職。同7年7月から現職。

1 陸軍大刀洗飛行場の歴史

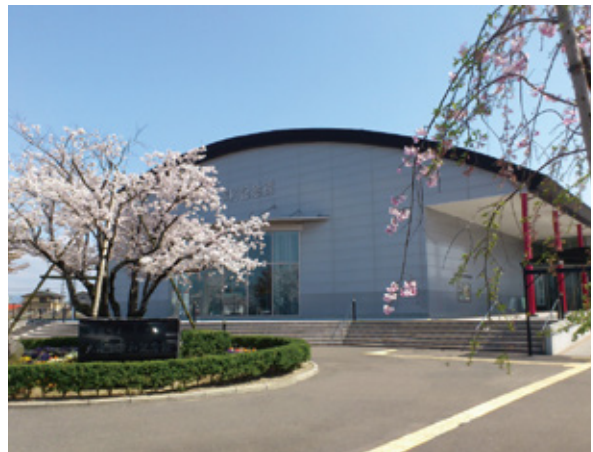
戦前、戦時中に東洋一を誇った陸軍大刀洗飛行場（以下、飛行場）。その歴史は大正8年から昭和20年までの26年間でした。同飛行場には昭和15年まで飛行第四聯隊が駐留、その後は大刀洗陸軍飛行学校（以下、飛行学校）となり少年飛行兵などの若きパイロットを養成した場所でもあります。飛行場周辺には飛行学校だけではなく、航空機の整備を行う航空廠、航空技術兵を養成する第五航空教育隊や陸軍機を製造する太刀洗製作所などがあり、2万人とも3万人とも言われた兵士や関係者が関わり、飛行場とその周辺は軍都として発展していきます。

飛行学校では延べ1万人のパイロットを養成、その中には陸軍特攻隊として戦死された若者たちも数多くいます。昭和20年2月、飛行学校は閉校、その後飛行場は終戦まで陸軍特攻隊の中継基地として多くの特攻兵を見送りました。戦火が激しくなると西日本における航空拠点であった飛行場は、米軍の攻撃目標になります。昭和20年3月27日と31日、米軍重爆撃機B29が合わせて180機襲来し、約2500発の爆弾を投下、飛行場と関連施設は壊滅的な被害を受けました。この空襲によって600～1000人の人々が犠牲になりました。森に逃げ込んだ国民学校の児童31名が1発の爆弾で爆死するという悲劇も起こっています。



上空から見た飛行第四聯隊

2 大刀洗平和記念館設立に向けた経緯



筑前町立大刀洗平和記念館

大刀洗平和記念館（以下、記念館）は平成21年10月に開館しました。平成17年、旧三輪町と旧夜須町が合併して筑前町が誕生、そのシンボリックな事業として建設し運営しています。建設にあたっては、戦時中に飛行場に関わった人々から多くの資料提供、証言をいただきました。

また、昭和62年から平成20年までは、甘木鉄道太刀洗駅舎を活用した民間の資料館として記念館が運営されており、その施設で収集された資料の多くを移管し保管、その一部を展示しています。散逸を逃れた資料、証言からは平和を願う多くの人たちの思いが伝わります。記念館は、平成29年には新館を増築し、特攻をテーマとした常設展示を充実し、多人数が平和教育に使用できる多目的室を設置、多くの修学旅行生を受け入れています。今年、開館16年目となった記念館は年間入館者が約10万人、開館以来の累計入館者数も175万人を超え、全国から来館されています。小中学生・高校生は修学旅行での平和教育のプログラムとして活用いただき、令和6年度は年間約330校、約2万5千人が来館しています。

のメッセージを発信する

3 記念館展示物と来館プログラム

記念館には開館当初から大型展示物として、戦時中に実際使われていた海軍零式艦上戦闘機三二型（零戦）と陸軍九七式戦闘機（九七戦）の実機を展示しています。両機とも世界で唯一の機体です。令和4年7月からは映画『ゴジラ-1.0』の撮影に使われた海軍局地戦闘機・震電（実物大模型）を展示しています。震電は米軍爆撃機B29の迎撃用として、海軍と九州飛行機（福岡市）で開発された機体です。試作機の段階で終戦を迎えたため「幻の戦闘機」と呼ばれています。



九七式戦闘機

常設展示では①航空技術の発展②大刀洗飛行場とその関連施設の概要や歴史③大刀洗空襲と陸軍特攻を大きなテーマとして、特攻隊員の遺書や手紙など実物資料やパネルによって戦前、戦時中の事実を伝え、平和の大切さを発信しています。

平和プログラムとして記念館スタッフによる飛行場の歴史・館内展示物の説明、映像の上映やボランティアによる朗読を行っています。戦争体験者がいなくなる中で、当時のことをどう伝えていくかは、記念館にとっても大きな課題です。朗読は戦死した兵士の遺書、戦争民話などを題材に行っており、ボランティアの語りに多くの修学旅行生たちが聞き入っています。



遺された言葉と想い（遺書と手紙のコーナー）

4 戦後80年の取り組み

令和7年は戦後80年という節目の年でした。戦争体験者の人たち、特に兵隊として戦地に赴いた人たちは生きていれば100歳前後であり、その多くが亡くなられ、その体験を聞くことが出来なくなっています。戦跡と言われる戦時中の軍用施設や戦争の傷跡が残る場所も戦争から80年が経過する中で無くなっています。記念館で行った戦後80年の取り組みの主なものを紹介します。

記念館では令和7年4月、元特攻隊員の鳥谷邦武さんの講演会を開催しました。大刀洗陸軍飛行学校で訓練を積み、戦闘機のパイロットとなった鳥谷さんは昭和20年3月に特攻隊に編成されます。先に特攻出撃した戦友は「特攻なんかで死にたくない」と本音を漏らし、「お前は来るな」との言葉を残したと話されていました。終戦後は帰国がかなわず、極寒のシベリアに1年9ヶ月間抑留され、そこでも多くの戦友を失いました。長い間、戦争体験を語らなかった鳥谷さんですが、講演会では戦争の不条理を訴えられていました。

筑前町では戦後80年と合わせ筑前町合併20周年の記念事業として、戦跡・掩体壕の保存・公開に向けた補強・補修工事を行い、令和7年4月から一般公開しています。筑前町に現存する掩体壕は、軍用機などを敵の攻撃から守る格納庫で、終戦間際に造られたものです。戦後は民有地となっていたものが、筑前町が平成28年に取得していたものです。戦争体験者が少なくなる中で、当時を伝える貴重な実物資料として、戦跡フィールドワークなどでの活用が期待されています。

5 当時の若者たちの想いを つなげていきます

戦前、戦時中と、飛行場には今の若者と同様、『未来』を夢見る若者たちがいました。飛行機に憧れ、家族を想いながらも戦地へと飛び立っていきました。彼らが守りたかったのは、いま私たちが享受している「何気ない日常」でした。

戦争という極限状態は、個人の尊厳や生きる権利を奪ってしまいます。記念館に展示している遺書や手紙は、気高い精神の記録であると同時に、個人の尊厳が奪い去られた時代の悲痛な叫びでもあります。記念館は、これからも彼らの想いを伝え、平和のメッセージを発信し続けていきます。

碓井平和祈念館のかたりつき



嘉麻市教育委員会 生涯学習課
文化推進係 学芸員

い とう
伊藤 みどり さん

2019年より文化財の臨時職員として地域文化財に携わり、2024年から文化財専門職(学芸員)として、碓井平和祈念館・碓井郷土館で戦時資料や地域文化財の保存・活用、展示企画を担当している。

1 地域にある「一人ひとりの戦争体験」を伝える場として

今から30年前、碓井平和祈念館は、「戦争」と「人権」という二つのキーワードをテーマに、「平和」について考える施設として開館しました。戦争のコーナーでは、主にアジア・太平洋戦争期の資料を中心に展示を行っています。碓井平和祈念館のある嘉麻市は、原子爆弾が投下されたまちでも、大規模な空襲を受けたまちでも、軍事施設が集中していた地域でもありません。強いて言えば、嘉麻市を含む筑豊地域では石炭が産出され、多くの炭鉱が存在していました。そこで採掘された石炭は、当時の主要なエネルギー源として戦争遂行を支える役割を担っていましたが、それ以外の点では、日本のどこにでもあった「まち」や「むら」と変わりません。当館では、そうした地域に暮らしていた人々、一人ひとりの戦争体験に焦点を当てた展示を行っています。展示資料は、特別な立場にあった人ではなく、ごく一般の人々が経験した戦争を伝えるものです。来館者が「自分が同じ状況に置かれたらどうするだろうか」「家族や身近な人が同じ立場だったら」と自然に考えるきっかけとなる場所でありたいと考えています。

2 戦後80年を迎えて — 失われつつある記憶 —

2025年は戦後80年の節目の年でした。全国各地で戦争と平和をテーマとした報道や企画が行われる一方、戦争を直接体験された方々の高齢化が

急速に進んでいます。近年では、ご本人だけでなく、その体験を知るご家族の高齢化も進み、「家じまい」や「終活」に伴って、ご自宅で保管されていた遺品や戦時資料の処分、あるいは寄贈についての相談を受ける機会が増えてきました。しかし、ご本人がすでに亡くなられている場合、その資料がもつ貴重なエピソードが分からないことも少なくありません。戦争を体験された方は、つらい記憶を思い出したくないという思いから、家族にさえ戦時中のことをほとんど語らずに過ごされた場合も多かったようです。その結果、記憶の継承が途切れてしまっている資料も数多く存在しています。今後、こうした状況はさらに増えていくことが予想されます。

3 語り部の声を つないできた取り組み

当館では、戦争の記憶を後世へつなぐ取り組みとして、2012年から、嘉麻市およびその周辺地域の方々の戦争体験を語り伝える講話会「語り伝える戦争の話」を、年1回実施してきました。語り部は、陸軍・海軍で実戦を経験した元兵士、戦死した兵士の遺族、満州からの引き揚げ体験者、銃後の動員に就いた女学生など、多岐にわたりました。それぞれの立場から語られる戦争体験は、若い頃、あるいは子ども時代の記憶でありながら、非常に詳細で、生々しいものでした。戦争がいかに強烈な体験であり、その後の人生に大きな影響を与え続けているのかを、私たちは毎回あらためて実感させられました。しかし、語り部の高齢化により、対話形式による講話会の継続は困難となり、2023年の第12回をもって、この取り組みは一区切りを迎えました。

4 資料と記憶で語り継ぐ 戦後80年企画展

「これから戦争の記憶をどのように語り継いでいくのか」という課題を抱えながら迎えた2025年の夏、当館では戦後80年企画展「あの日の声が聞こえる—記録と記憶をたどるアジア・太平洋戦争—」を開催しました。本企画展では、過去の「語り 伝える 戦争の話」で語っていただいた語り部に関する資料や、兵士として戦争を体験した方が戦後に制作した美術作品などを展示しました。資料に付随するエピソードを共有することで、戦争の記憶を次の世代へと手渡す場とすることを目指しました。兵士として戦争を体験された方々は、すでに100歳近い年齢となっており、直接声を聴く機会を設けることは難しくなっています。そこで、個人の遺した資料と、当時の新聞や雑誌といった社会的記録を並べて展示することで、アジア・太平洋戦争を「個人」と「社会」という二つの視点から見直す構成としました。現在、この展示は内容の一部を見直し、「記憶」をテーマとした常設展として継続しています。

また、関連イベントとして、過去の講話会の記録集から兵士の体験談を抜粋し、朗読会「兵士たちが語った戦争—『語り 伝える 戦争の話』より—」を開催しました。語り部ご本人ではありませんが、残された言葉を朗読という「声」の力で届けることで、当時の状況や思いを耳から感じ、展示資料とあわせて、より深く心に響く時間となったのではないかと感じています。

5 被害と加害の両面に 向き合うということ

来館者アンケートで多く寄せられる感想の一つに、「日本が受けた被害だけでなく、加害の歴史にも正面から向き合っている」という声があります。これは、嘉麻市に比較的大規模な炭鉱が存在し、朝鮮からの移住者や捕虜の強制労働、さらには捕虜殺害に関与したBC級戦犯に関する資料を展示していることに向けられたものと受け止めています。戦争は、どこにでもいる普通の人々を、被害者にも、加害者にもします。資料が語る当時の戦争の姿は、目を背けたくないような内容を含むこともあります。それでも、過去に何があったのかを知り、どのように伝えていくのかを考え続けることが、戦後80年を経た私たちに求められていることではないでしょうか。当館は、これからも地域とともに、戦争と静かに向き合い、考える場であり続けたいと考えています。もし、今なお身近に話を聞ける方がいるのであれば、ぜひ戦争のことに限らず、昔の話に耳を傾けてみてください。そこには、継承すべき記憶だけでなく、現在、そして未来を生きるための道標がきっと見いだせるはずです。



碓井平和祈念館外観



しょうけい館(戦傷病者史料館)
学芸員

はん ど あや
半戸 文 さん

國學院大學大学院文学研究科史学専攻 博士課程後期単位取得退学。
2019年9月より現職。資料整理、企画展示など学芸業務全般を
担当。戦後80年の2025年は、国立ハンセン病資料館のトークイベ
ント「戦争の記憶に触れ、それを継承すること」、首都圏形成史研究
会のシンポジウム「戦後80年 戦争を伝える—博物館・文書館の企画
展示事業から—」に登壇しました。

1 しょうけい館の紹介

しょうけい館は厚生労働省が援護施策の一環として
設置した、戦傷病者等が体験した戦中・戦後の労苦
について、広く知る機会を提供し、また後世に伝えて
いくための施設です。館名の「しょうけい」は、漢字
で「承継」と書きますが、親しみを持ってもらえる
よう平仮名で表記しています。また、館の性格を示す
ために「戦傷病者史料館」を併記しています。

館の成り立ちは、1998年に財団法人日本傷痍軍人
会から国に対して、戦傷病者等が戦中・戦後に体験
した労苦を後世に伝えることを目的とした戦傷病
者等労苦継承事業(仮称)の実施について要望が
出されたことをきっかけとして、2000年から調査・検討
が進められ、2006年3月に史料館が開館すること
となりました。2023年10月、地区の再開発により移転
しましたが、場所は開館時と同じ九段下(東京)です。

戦傷病者とは、戦傷病——先の大戦において戦闘
による受傷や、事変地・戦地における罹病、勤務
関連に関しては主に本邦等における罹病——を負った
軍人、軍属、準軍属を指します。厚生労働省の援護法
における説明に依拠していますが、戦時中に「傷痍
軍人」と呼ばれた方々に加え、戦後の援護施策の
変遷により、軍属・準軍属も援護の対象となり「戦傷
病者」という名称になりました。また、「戦傷病者等」
の「等」は、傷病を負った戦傷病者の介助、看護や家庭
の維持等のため、長年にわたって労苦を共にして
きた妻等の家族を指しています。これら戦傷病者等の
資料を中心に、軍医や衛生兵、看護婦だった方の資料
や、関わりのある方々の資料も広く収集、保存、展示
しています。

常設展示は、「ある兵士の足跡をたどる」という形
で、1人の若者が徴兵検査を受けて軍隊へ入り、
戦地で傷病を負い、野戦病院で手当てを受け、病院
船で日本へと戻り、軍の病院での治療を経て退院、
終戦後は恩給が停止され生活が困窮し、その後も
後遺症などと闘いながらも、仕事をし、家族を養い、
生き抜いてきたというストーリーで構成しています。
その中で、戦傷病者の一人ひとりの体験を見つめ
られるよう資料を展示しています。

2 戦後80年の取り組み

戦後80年を迎えた2025年は、2つの特別企画展
を通常より会期を長く設けて開催しました。

一つ目は、「武良茂(水木しげる)の戦争体験」を
初夏から秋にかけて開催しました。戦傷病者であり、
著名な漫画家である水木しげるさんの戦地パプア
ニューギニアでの軍隊生活と受傷病、現地の人びと
との交流や、代表作『総員玉砕せよ!!』、『昭和史』
などの作品に描かれることとなった戦争体験について
取り上げました。開館以来、水木さんの企画展示は
行ってきましたが、多くの方に戦傷病者の体験に関心
をもってもらえるよう、これまでよりも漫画等の作品を
多く取り上げました。

二つ目は、「しょうけい館証言映像展 証言がつなぐ
あの日の記憶」を秋から冬にかけて開催しました。
これまでに収録してきた証言映像をテーマに据え、
収録に協力いただいた戦傷病者と家族のたどった
人生を紹介し、寄贈資料を展示しました。しょうけい

館の開館準備期間中から収録を続けてきた証言は現在200本ほどになりました。直接戦傷病者の声を聞くことが難しくなってきた今、映像は私たちに多くのことを語ってくれる貴重な資料であることを再認識する機会となったと思っています。

このほか、国立ハンセン病資料館と共催で「戦後80年 戦争とハンセン病」を夏に開催しました。しょうけい館からは従軍中にハンセン病を発症し、ハンセン病療養所への入所を余儀なくされたハンセン病回復者（戦傷病者）の資料と証言映像を出展したほか、しょうけい館の次世代の語り部による講話なども実施しました。

振り返ってみますと、2025年の夏をピークとして例年以上に来館者が増え、特に8月はメディア等ではしょうけい館の取り組みが取り上げられる機会も多くなりました。「戦後80年」というキーワードが、戦争体験を知りたいといった気運につながり、来館の動機となっていたことがよく分かった一方で、秋頃からそのような雰囲気は徐々に消えていったような印象も受けました。戦傷病者と家族にとっては、現在までの戦後の80年間もまた労苦のあゆみで、受傷した日、帰国の船に乗った日、病気を診断された日などが忘れもしない日であり、「終戦〇〇年」、「8月15日」といったフレーズが必ずしも節目とはならないのではないかと考えさせられました。身近にある体験記や証言にふれ、記録から記憶を知ることが、改めて必要だと感じさせる戦後80年だったと思います。



戦傷病者が使用していた鉄脚とよばれる義足

3 戦後81年から…

改めて言うまでもないことですが、例えば20歳で終戦を迎えた人の年齢は100歳を超えており、戦争体験者不在の時代の到来はすぐそこまで迫っています。このことは、2013年に、会員の高齢化による日本傷痍軍人会・妻の会の解散が決まった戦後68年頃からしょうけい館では強く意識していました。当館においては戦後70年の2015年に、厚生労働省の事業として、戦中・戦後の労苦を直接体験した人が減少することを踏まえ、次世代に伝えるための戦後世代による語り部の育成事業が始まりました。戦後70年から、次世代の者が戦傷病者の体験を伝えていく時代に入っていったとも言えます。

戦争の記憶を伝えていくにあたり、私たちが取り組むべき課題は多々ありますが、戦傷病者が遺してくれた様々な記録は、多くのことを私たちに語りかけてくれます。記録を残さなかった、あるいは残せなかった人も多くいますが、遺された記録を丁寧に見つめることで、何故記録がないのかも考えることができます。これからも変わらずに一人ひとりの体験や記録を伝え続ける重要性を問い直し続けながら、戦後何年であってもしょうけい館に課された役割を果たしていきたいと思っています。



野戦病院ジオラマ 麻酔なしでの手術の様子

「被害の実態」・「被差別の現実」はどこにあるのか

(公財)福岡県人権啓発情報センター 館長 谷口 研二

本号で半戸文さんに寄稿いただいた「しょうけい館」(東京都千代田区)について、毎日新聞が報じています^(※1)。そこには、①戦争中多くの兵士が精神疾患で入院したが、旧日本軍はその存在を否定した、②当事者や家族はそれを「恥」と考えて体験を語らなかつたため、被災実態が明らかにならなかつた、③近年、元兵士の子も世代が作った家族会が国に実態調査を求め、調査・展示につながつた、と書かれていました。

社会学者の奥田均さんは、阪神淡路大震災(1995年)を振り返って、震災の実態の受け止め方の変化について次のように書いています。(概要)^(※2)

①写真や映像で災害のすさまじさを知つた→
②支援に訪れた現地で立ちすくむほどの恐怖に直面した→
③各種統計によって巨大な被害の全体状況が更新されていった→
④被災者の生活や思いを知り、「心の傷」の問題や災害の社会的側面に気づいた……。

このような戦争体験・被災認識の深まり・広がりを手がかりにして、「部落差別(被差別)の現実」の見取り方について論議したことがあります。

まず(a)「見える現実」(差別事象や生活等の

現実を知る)→(b)「見えてくる現実」(報道や統計を通して、見えてなかつた実態に気づく)→
(c)「語られる現実」(体験を語る人と出会う)→
(d)「語られない現実」(厳しすぎて「語る」ことができない)事実があることを知る)→そして、
(e)「相談によって明らかになる現実」(相談システムや相談できる関係があることによってはじめて可視化される実態があることを知る)

福岡県同和教育副読本『かがやき』^(※3)に、「差別があるから 語れない／差別があるから伝えたい／一番言いたくないことは／一番わかかってほしいこと」という歌詞が載っています。

「(被害・被差別の)厳しさが差別の実態を覆い隠す」という差別の恐ろしさ(奥田均)への想像力をもって、被害や被差別の現実に向き合いたいと思います。

自己の「被害への無自覚」は他者に対する「加害への無自覚」につながっていくかもしれません。

(※1)毎日新聞2026.2.26号

(※2)奥田均『人権のステージ』(1998解放出版社)

(※3)福岡県同和教育副読本『かがやき』(高等学校用)

どうわもん だい きょう しつ 同和問題教室

ヒューマン・アルカディアでは、同和問題について専任の講師がわかりやすく解説を行う同和問題教室を実施しています。

講師による講話と常設展示室の展示解説を通して、同和問題の歴史などを詳しく知ることができ、職場やPTAの研修等にもご活用いただけます。詳しくは当センターまでお問い合わせください。



JR鹿児島本線春日駅から90m

西鉄天神大牟田線春日原駅から720m



あなたの声をお聞かせください

ヒューマン・アルカディアに対する質問や要望などをお待ちしています。

TEL:092-584-1271 FAX:092-584-1273
E-mail:f-jinken@fukuoka.email.ne.jp

インターネットを使って施設のご案内などを行っています。
アクセスは、下のアドレスまたは二次元バーコードまで。

WEB <https://www.fukuokaken-jinken.or.jp/>

公益財団法人

福岡県人権啓発情報センター

〒816-0804

春日市原町3丁目1-7 クローバープラザ7階

◎総務課／TEL:092-584-1270

◎事業課／TEL:092-584-1271 FAX:092-584-1273

令和8年3月11日発行

